

知能は幼児期に形成されます。つまり家庭教育が一番大事なわけです。家庭教育さえしっかりやっていたら、今の普通の小学校の教育はバカバカしく感じると思います。たとえば欧米でノーベル賞をとるような学者は、小・中学校には行っていない人が多いのです。また、12、3歳で大学に入学しています。入学試験さえ通れば年齢を問わず入れてくれるわけです。

数年前の話になりますが、イギリスのケンブリッジ大学を16歳で卒業したという少女がいました。数学科を何と主席で卒業しているのです。そしてこの少女をアメリカのハーバード大学が教授に迎えたというのです。驚いたことにこの少女は、小学校、中学校、そして高校には一日も行っていないのです。父親が家庭で教育したそうです。

この父親というのがなかなか面白い人で、自分の子どもは個性が強いから、学校へやったらダメになってしまうと思って、自分で教育する決心をしたそうです。もともと普通のサラリーマンだったのですが、奥さんに「すまないが働きに出てくれないか。私は家において、炊事洗濯から子育てまで全部やるから」と言って、夫婦の分担をちょうど逆にして、この少女を教育しました。

私もこういった教育法には賛成なのです。それは個性に潰されないほど強い子どもならいいのですが、何といても今の学校教育は画一的すぎると思うからです。だいたい試験のために勉強するのはおかしいです。

私自身、中学生の時には試験勉強は一切しませんでした。試験は自分の実力を測る「ものさし」の一つではあるけれど、試験の前日に一生懸命丸暗記して、それでいい点が取れたとしても、それはとても愚かなことのような気がしたわけです。試験の前になるとかえって普段しないようなことまでして遊んだものです。臍曲がりといえばその通りですが、それでも成績は悪くありませんでした。

もちろん人間の脳はいろいろな要素が絡み合っていてできあがりますから、一概にこうと言い切ることはできませんが、やはり家庭環境は強く影響しているといえるでしょう。

私の場合、両親は何かを教えてくれるということがなかったので、幼児期には独りぼっちでいろいろなことを空想する、つまり一人遊びが好きでした。与えるものが多すぎるのはダメで、自主的に考えることこそ大切だと思っています。